**鳳凰堂**

 鳳凰堂は、日本で最も象徴的な建造物の1つであり、現存する平安時代（794〜1184）最大の建造物です。千年間もの消耗に耐え、平等院というかつての大寺院群の中でも特異な史跡です。日本政府は1951年に、鳳凰堂を国宝に指定し、それ以来10円硬貨のデザインに採用されています。

 建物の名前は、瓦屋根に配置された2羽の黄金の青銅の鳳凰と、寺院の独特な床の平面図に由来します。廊下は建物の両側から外側へ、建物の後部からも後方へ伸びており、羽を伸ばした鳥のような形状になっています。廊下は主に装飾的です。床は高床式で地面から数フィート上昇しており、天井は非常に低く、大人なら、身をかがめなければ歩けないほどです。

 藤原頼通（992 –1074）は、1053年に、雲の向こうに存在すると信じていた天宮の宮殿である阿弥陀仏の西方極楽浄土を模して院を建立しました。その建物は、高くそびえる屋根と隣接する池に映った姿との間に浮かんでいるように見えます。院とそこに納められた阿弥陀仏は、しばしば、東の山を越えて差す朝日が当たり、ますます浮いているように見えます。